

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもと
づく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部60円
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7
TEL (3404) 7661
E-mail address yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

8月25日改悪都条例施行すな！



裁判に訴えても
たたかう決意の

新井英子さん
(都営広尾住宅在住)

東京都は8月25日から都営住宅入居者の名義人の死亡後に継続して居住できる人を原則として配偶者にしか認めないとする制度改悪を強行しようとしています。東京都生活と健康を守る会連合会は7月9日、都営住宅名義人の承継は現行どおり一親等(親、子)のみとするのとを要望し緊急の対都交渉を行いました。都営広尾住宅に住む新井英子さんの精神障害を持つ娘さんも参加し施行中止を迫りました。

渋谷生活と健康を守る会会員の新しい英子さんは、代々木健康友の会でもあります。英子さんは、精神障害2級の50歳の娘さんと広尾都営住宅で二人暮らしです。

「都は、8月25日時点で60歳に満たない私の娘を、私が死ねば追い出すというのです」「1級の障害とはどんなものか、都は実態を知らない」と新井さんは憤ります。「1級だったころの娘は、幻聴・幻覚に悩まされ、」

「もともと国の障害者への対策が遅れています。発症が20歳未満でないと障害年金も受給できない。私の娘の場合も、申請時、法律で決められたカルテの保存期間が過ぎていたのですが、かつて受診した病院がカルテをマイクロフィルムで保存していたので、発症時期を証明できました。でも、かくれた障害者は、たくさんいると思います」

新井さんの娘さんは都交渉に参加し、文書発言しました。

「77歳の母と50歳の私は、都営住宅入居時から生活保護水準をわずかに上回る非課税世帯で、母親は要支援1で、私は精神障害2級です。母が死亡したら、父親の遺族年金と母親の国民年金はすべて打ち切られ、傷害年金だけだと生活保護を受けないと人間らしく生きていけない。それでも追い出さなければならぬ。何かが考えられるのか」

「都は障害者の実態を理解しないで悪い方へ運用を進めている」と新井さんはいいます。「以前、同じ団地に住んでいる障害者がお風呂の取り替えについて都に申請したことがありました。都営住宅のお風呂の規格は決まっています。高く障害者には入りにくいのです。入りやすい風呂への交換を都に申請したら、その人は上半身が障害1級、下半身が障害3級だから助成できないと言われたそうです。その人の足は、ようやく歩ける程度なのに」

障害者の子が都営住宅から追い出される

新井さんの娘さんは都交渉に参加し、文書発言しました。

「77歳の母と50歳の私は、都営住宅入居時から生活保護水準をわずかに上回る非課税世帯で、母親は要支援1で、私は精神障害2級です。母が死亡したら、父親の遺族年金と母親の国民年金はすべて打ち切られ、傷害年金だけだと生活保護を受けないと人間らしく生きていけない。それでも追い出さなければならぬ。何かが考えられるのか」

和解した東京大気汚染公害裁判

医療費助成と公害対策を実現

原告は、ディーゼル排ガス公害をストップし、東京にきれいな空気を取り戻すこと、公害病未認定患者の救済制度を汚染者負担の原則に基づいて創設することをめざしてきました。自動車メーカーを初めて被告として訴え、その社会的責任を問いました。

東京高裁での和解協議を通じ、公害発生責任を負う国、東京都、首都高速道路会社、自動車メーカー7社が拠出し、都内全域のすべてのぜんそく患者を対象とした自己負担なしの医療費助成制度を創設させたこと、国と都に本格的な公害対策を約束させたことは大きな成果です。

自動車メーカーは、解決一時金、医療費助成制度への拠出あわせて45億円を負担します。

代々木病院も原告支援のなかで、「ぜんそく発作で外来受診した青年に、お金が無いらから1日ぶんだけ薬をくださいといわれた」という医師もいる」と、医療現場から早期患者救済を裁判所に要請してきました。



東京にきれいな空気を取り戻すことをめざして、11年に及んだたたかいは、和解で全面解決することになりました。

渋谷原告団の加藤慧さん(写真)は、「被告である国や都、メーカーらの財源拠出で、都内に15万人といわれるぜんそく患者の医療費を助成する制度が実現しました。」

国・都・首都高・車メーカー7社相手に

東京にきれいな空気を取り戻すことをめざして、11年に及んだたたかいは、和解で全面解決することになりました。

渋谷原告団の加藤慧さん(写真)は、「被告である国や都、メーカーらの財源拠出で、都内に15万人といわれるぜんそく患者の医療費を助成する制度が実現しました。」

元代々木病院副院長

中田友也医師が死去



元代々木病院外科部長、同副院長で法医学者の中田友也医師が7月7日、病気のため死去しました。88歳。葬儀は行われました。1952年、代々木診療所に副院長として就任、97年に故佐藤猛夫名誉院長とともに退職し、87歳で医療活動に終止符を打つまで、患者さんのために尽くしました。

手術台

また「あの日」がやってくる。被爆者はみな老いてきている。被爆70周年に

何人の人が生き残っているのか▼被爆者は「生きていくこと」自体に罪の意識をもっている。誰に對して? 「あの日」死んでいった人、「水を、水を」と求めたのに見捨ててきた人、今はその責めよりも「まだ生き残らされている」「意味」を見出せず悩んでいる。各地の「原爆症認定」を求める集団訴訟もそれなくしては考えられない。「今自分が病んでいる癌や肝炎は被爆に起因している」「被爆は国が始めた戦争で起こった以上、自分の病気も国の責任だと認めよ」これが被爆者の主張である。ある被爆者は言う「国が認めること」は、私たちにとって「あの日」死んでいった人たちが求めた水、末期の水と同じ。せめてそれを飲んで死にたい」と▼核廃絶の運動も被爆者の心情として、年一回のイベント化してしまう。閣僚までが日本の核装備を口にしていて62年目の今年こそ歴史の分水嶺である(ま)